

私が死んだ時

夢遊星人

私が死んだ時

くるえるストーリーズ

私が死んだ時

夢遊星人 作

暗い、息苦しい、ここはどこだろう。私はどこにいるのだ。何も見えない、何も聞こえない。叫ぼうとしても声が出ない。まるで真空の中に叫んでいるようだ。口だけがもがいている。

きっと私は夢を見ているのだろう、子供の頃によく魘された、怖い怖い夢を。どうして醒めないのだろう、意識はこんなにはっきりしているのに。怖いくらいにはっきりと、自分が判る。それなのに闇は去らない。何も見えない、何も聞こえない、ひどくうそ寒い。

突然、慄えが走った。ある記憶が、霧の中から飛び出るように、甦ったのだ。私は死んでいるのではないか。そうだ、私は死んだのだ。あの瞬時の苦痛が、まだ私の体のどこかに残っている。私の体？

再び慄えが走った。死んでしまった私に、体がある筈はないではないか。手も足も、感じられない。顔も口も鼻も眼もない。ただ、意識だけがある。暗い、寂しい、恐怖の意識だけが。

私は何処にいるのだろう。いや、それよりも、私はどうなったのだろう。死は存在を滅ぼすことができなかつたのか。それとも、死は私を何かに変えてしまったのか。いずれにせよ、私はまだ存在している。いかなる存在であるとしても、私自身を滅ぼしきれなかつたことは、どうやら確かだ。

慄えが止まらなくなった。すべては無意味であったのか。あらゆる苦しみを、生の岸辺に置き去りにして来たつもりが、それなのに私はまだ、こうして苦しみから解き放たれずにいる。死によって獲たものが、永遠の忘却ではなく、永遠の呵責であったとは。虚無の安らぎではなく、果てしない不安と孤独の無間地獄であったとは。

地獄という観念は、私を一層の不安におとし入れた。そのような迷信は、死の直前でさえ、私の頭に泛ばなかつたのに。私は地獄に落ちたのか。人間はただの物質で、死ねばやはり物質に戻るだけと、あれほど疑いないことに思えたのに。私は消滅しないで、このような闇の中に投げ込まれてしまった。

それにしても、ここはどういう地獄だろう。人は罪に因って、様々な地獄に落ちるという。往生要集を興味本位に読んだ時、その有様が克明に描かれていた。無知な人々を搾取するための、坊主達の巧妙な脅しとしか思われなかつた。

しかし、現に私は地獄に落ちているのだ。無限の夜、無限の沈黙、無限の不安、ここが地獄でない筈があろうか。神や仏など考えたこともなかつた。信仰なんて軽蔑していた。私が真っ先に<そこ>へ落ちたとして、何の不思議があろう。なんという無謀な賭けであったか。

そう思うと、急に何か絶対的なものに縋りつきたいような、悲しい気持になった。しかし、それも束の間で、真黒な闇の中から、そんな私の突然の豹変をあざ笑うような、悪意に充ちた気配がひしひしと押し寄せてきて、たちまち私の心を堪えきれない恐怖で締めつけてしまった。

息もできないというのは、死んでしまった身にはおかしな表現ではあるが、そんな恐怖が、もはやこれ以上存在を無くすることのできない私を、責めさいなんだ。

私はなぜ死んだのだっだろう、という悔いに似た気持が、今更のように起こった。たしかに、生きることには堪えきれなかった。死の休息は、心と魔のように私を誘ったのだ。その直前まで、死のことを具体的に考えていたわけではない。火に追われた人が、がむしゃらに窓から身を投げのように、出口もなくもがいていた私の前に、非存在という底なしの井戸が、突然に開けてきた。その時私は、そのひんやりした忘却の香りに、つい引き寄せられていったのだ。

真夜中に私は、町はずれの線路上を歩いていた。空を覆った厚い雲が、一角だけボォーと明るいのは、背後に月の隠れているせいだったか。その晩私は、どこというあてもなく歩き続けていた。自分の意志が足を動かしているというよりは、えたいの知れない胸苦しさが、背後から私を容赦なくつきたてて、じっと留まっていることができなかった。

疲労と悲しみとで、意識はぼんやりしていた。遠くの方で、警笛が二度ばかり起こった。幽かな地響きが伝わり、やがて金属の唸る音がしだいに高まってくる。戦慄が全身を貫いた。でも、私の足は歩き続けることをやめない。暗い塊が、前へ前へと私を押しやっていく。私はまるで他人を眺めるように、そんな私を茫然と見やっていた。

ふわっと黒い、眩しい塊が、眼の前に躍りでて、私はまるでそれを擁き抱えでもするように、迎えた。一瞬の衝撃のあとは、ただ果てしない空白・・・の筈だった。

どんなに深い眠りに落ちていく人でも、やがては目覚めるという安心感がある。それに対して、永遠の眠りに就く人は、決して覚めないという確信がなければ不安である。人々が唯物論を信奉して、そこに安堵を求めるのは、このためなのだろう。苦しみも悲しみも、命あればこそで、昔のストアの賢人が言ったように、死は万病の薬なのだ。そうであった筈なのだが・・・。

どのくらいの時が経ったのかは知らない。まるで時など経たなかったかのような気もする。眠りの深い人には、就寝してから目覚めるまでの間、まるで瞬時のように感じられることがある。淡い意識が、私がまだ完全な非在ではないことを、幽かに告げていた。それは白色の空間に、心と靄のようによぎる不安の影であった。その影は、たちまち、夏の地平を黒雲の侵食するすばやさで、私の白紙の意識を翳らせていった。

私は正体の知れない魔物に追われている小児のように、泣き喚きながら、暗黒の空間を逃げ惑っているのです。しかし、自分自身の内部から湧きでてくる恐怖を、どう逃れることができましょう。すべては夢だ、何もかも夢なのだ、はやく醒めてほしい、どうしていつまでも闇のままなのだ、早く朝が来てほしい。

私の懸命に逃れている、黒い影の正体はわからない。ただ、その気配が恐ろしいのです。百千の眼に見えない触手が、四方から私の存在を驚づかみにしようとして、じりじりと迫ってくる。

到頭その一つが私に触れたと思った瞬間、何億ボルトとも知れない電撃が私を貫き徹したかのような震撼が、私を打ち砕き、私という存在はあっという間に散り散りの原子となって、空間の中に飛散していました。

再び空白があって、私は今度こそ本当に非在と化した筈でした。遠い家の灯りのような光が、ぼんやりと空間にとまりました。その光は、次第しだいにこちらへ近づいて来るようです。提灯ほどの大きさになりました。驚いたことに、それは人の顔でした。まったく見知らない男の顔です。

それからまた、もう一つの光が近づいて来ました。やはり人間の顔です。その表情が見分けられるくらいに近づいてきた時、私ははっとしました。その顔は奇妙に変形して、歪んでいましたが、確かに父のものでした。何かにひどく怯えているようでした。闇の空間に飛び上がったその顔は、しばらく硬直したまま、何ものかを瞬きもせず見つめていました。それから、見知らない男の顔に二、三度うなずき、一緒に遠ざかってゆきました。

またもや空白が訪れてきました。そして再び、淡い覚醒が。ちょうど浅い眠りの時のように、意識と空白とが交互に繰り返される。それは同時に恐怖の反復でもあるのです。闇の中の自己の、絶対に孤独な存在を、確認するだけの意識なのですから。

でも、まれに闇が開けて、不思議な光景が飛びでることがありました。私自身の状態をある程度推測できていなかったならば、まるでいつまでも目の醒めない、悪夢のように考えていたことでしょう。

私はある薄暗い部屋の中にいました。大きな手術台のようなテーブルが中央にあって、その上にはなにやら、ものの塊がおかれていました。そのものを一瞥した途端、存在を奥底から貫くような恐怖に襲われました。それは人間の肉塊でした。そして私には見覚えがありました。それは私自身だったのですから。

私自身であったものと言うべきかも知れません。今、私はそれを他者のように見おろしているのですし、その肉塊は正視するに耐えないほど無惨な有様でしたから。胴のところで二つに裂けていて、なにやらどす黒いものが餡子のように出ていました。両腕は付け根からもぎとれ、片脚が腿のあたりで切断されていました。首から上はどこにあるのか、見当たりません。ふさふさした髪が生々しくその辺を覆っているばかり。よく見ると、髪の間から肉の塊がのぞいています。とても顔と言えたものではありません。傍に置かれた二個のガラス玉のように見えたのは、飛び出た眼球でした。

部屋の中には、さっきから人がいました。白衣を着けたその男は、やがてテーブルにやって来て、何やら光るものを手にして、私であった肉塊の上にかがみこみました。よく見ると、手にしているのは縫い針で、どうやら私の腹部を縫い合わせているようです。それから私の手足を整えて、人造人間のようにもとに戻しました。私は人の形はしていても、自分でも見るからに痛々しい姿で、そこに横たわっていました。ただ、顔だけは白い布が巻かれました。

その身体は、いつの間にか白い帷子（かたびら）をまとって、白木の棺に納まっていました。悲しいことに、そこは故郷の家でした。人が集まっていた。親戚やら、友人やら、知った人の顔が見えます。父の蒼ざめて、やつれたような顔も。それから、眼を泣き腫らした姉の、いつになく白い顔も。

と思うと、私の身体は、棺ごと煤けた炉の中に送り込まれていました。たちまち辺りは真っ赤な炎の海と化し、棺は茶色く変色して、やがて火炎に合わせてめらめらと燃え上がりました。やがて私の体は黒く焦げ、炭の塊と化し、次第にその形も崩れ、灰と化するにつれて、白い骨が浮き彫りのように現われてきます。

石灰岩のようにま白くなった骨は、拾い上げられ、骨壺に納められて、父と姉と共に、家に帰ります。私はそれを、悄然と見送っていました。

私は時折り、故郷の家に帰ります。それは私の意志であるというよりも、何か強い力に牽かれて、いつの間にかそこにいるのです。いつもの私には、自分の居所が少しも判らないのです。もちろん、死人なので、どこにも存在する筈はないのですが、私が自分の存在を意識することがある時は、たいてい前後左右も見分けられない無明の闇の中に、実体もなく彷徨っています。それが実に寂しいのです。たまらなく不安なのです。

家には、私の母のささやかな仏壇に、新たに私の写真が飾られていました。母の写真が右、私のが左に置かれています。ここへ来ると、私の寂しさは僅かながら慰められます。

母は私が小学生の頃に亡くなりました。ここへ来ると、ふと懐かしい気配が、微風のように私の中を過ぎていくような気がします。私は初めて、独りではないという安堵を覚えることができました。

(Da Capo)